

前例を超えた人がいた、そしてアクションを起し、
制度や仕組みとしてできあがったのだと知りました
岡部明子 看護教員

ゆきさんのお名前を初めてお聞きしたのは、「寝たきり老人のいる国いない国」の本に出合った時でした。1983年に看護大学を卒業後、病院を基盤とした訪問看護の実践の場へと飛び込み、13年間で多くの学びを得て、次に看護教育の場での在宅看護の普及と発展による人材育成への貢献ができればという思いで27年間取り組んでまいりました。

その中で自分なりにこれは大事と思うキーワードとして、個別性、行動変容、主体的なセルフケア、Participation（参加）、自己決定、信頼関係・ラポールの形成、多職種連携・チームアプローチ、ケアコーディネーション、インフォーマルサポート、当事者性といった言葉がいつも頭に浮かぶのですが、今回の講義では、かなり共通する部分があるように感じられました。

そしてそれらのワードがただ概念として重要というよりは、〇〇さんが「前例を超える」ことで実現させてきたという事実の裏付けがあつてのことだ、ということが明確に示され説明されたような気がします。

そこから前例を超えて何かを成し遂げた方に直接会って、話を聞いて、そこに至った背景をしっかりと把握することがいかに大切なことなのかということを感じました。

そして、何か重要なことを、根拠をもって説明するにあたり、ジャーナリズムの「取材」という手段を通じた情報収集によって得られたデータがどのように活用され、制度や仕組みを変えていく可能性へとつながるのか、そのプロセスの一端を垣間見たような気がしました。

今回の講義の中で名前をあげてご紹介いただいた方々のことをよくは知らなくても、ノーマライゼーションなどの言葉はこれまでも学んだり考えたりしてきました。

つまり、重要な考え方や概念は、誰かが考えて、さらにアクションを起こして始めたことにより制度や仕組みとして出来上がってきた経過があるのであり、それが前例を超えて、という表現で集約されていることがわかりました。

人が社会に影響を及ぼす、ということは、身近には感じないことが多いわけですが、今回の講義から、身近かそうじゃないかではなく、まぎれもない事実として、そういう前例を超えて動いた人が新たな前例を創ったから今がある、ということ強く感じました。

そして、それらの人々は決して一人ではなく、多くの人とつながっていたこと、多くの多様な力が役割をもって機能して相互作用が働いていたこともわかりました。

筋ジストロフィーを患い車いすで生活されていたクローさんが自分で面接をして雇用したヘルパーさんたちのそれぞれの強みを生かした支援体制を構築していてその費用が市町村により賄われているというお話を聞いたときには、とても驚きました。

しかしよく考えると、それが社会というものであり、様々な能力の人が集まって補い合って成り立っている、という当然のことが病気や障害があってもできるようにしているだけなのだと気づきました。

病気や障害を抱えていても、普通にその人らしく暮らすこと（ただ家にいて衣食住が足りているのではなく、外出したり人と交流したり、仕事をしたり役割を果たすこと、楽しむこと）を希求することは、国を超えて人としての願いであり、そのためにお互いに良いところを尊重しあいながらつながっていければよいのだなと思います。

しかし、そうした誰しもが願う状態を作り出すためには、善意やボランティア精神に頼るのではなく、社会のコンセンサスを得た、税金なりコスト負担の仕組みをつくることで富の再分配をする必要があり、そこに、行政、政治、そしてメディアの役割が大きくクローズアップされてくるのだろうと考えました。

私はまだそうした側面のことについての知識も浅く考えが深められていませんが、この講座を受講しながら、わたしたちの社会が抱えている課題についてより深く考えていきたいと思っております。

これまでの自分の視点とは異なる方向からのまなざしをもって考えるきっかけを与えていただいたように思います。ありがとうございました。